

# Habitat Japan Newsletter

ハビタット・ジャパン ニュースレター

Vol. **43**  
July 2021



新型コロナウイルスの感染拡大により命を守る行動が求められる中、この一年各国のハビタットオフィスはボランティアをはじめ関係者の安全を第一に、時に活動を休止または縮小しながら「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現に向けて取り組んできました。新型コロナウイルスの世界的大流行の収束が見通せない中、日本の経済も低迷し、多くの事業活動が縮小されるなど、人々の生活を維持するための雇用や住宅の確保にさまざまな支援策がとられてきました。しかしながら、最低限度の生活を保障する最後のセーフティネットである「生活保護」の申請からさえこぼれ落ちる人がいます。コロナ禍の長期化によりますます住まいの維持が難しくなり、住居喪失に陥る人が増えることが懸念される中、ハビタット・ジャパンはPHWを通して支援を続けています。

## 新しい住まいにつなぐ：入居支援

ハビタット・ジャパンは2018年に東京都より居住支援法人として指定を受け、以来、東京23区を中心に、住宅確保要配慮者(低所得者、被災者、高齢者、障害者、子どもを養育するもの、その他住宅の確保に特に配慮を必要とする者)の円滑な入居を促進するために、物件情報の提供から賃貸契約のサポート、引っ越し支援などを通じて住宅の確保をサポートするほか、必要に応じて入居後の見守りを継続しています。また、ホームレス支援団体や訪問看護サービスを提供する福祉団体など7団体から構成されるコンソーシアム「ハウジングファースト東京プロジェクト」の一員として、住まいを失った方や精神疾患をお持ちの方の住まい探しをお手伝いし、住まいを起点に安定した地域生活が送れるよう支援しています。



住まい探しの相談や  
物件情報の提供



内見の同行や  
賃貸契約のサポート



家財道具の購入や  
引っ越しのサポート



入居後の生活支援

ハビタットが支援する方の住まい探しは困難を極めることが多く、たくさん時間を要します。限られた年金で暮らす高齢の方や、生活保護など福祉手当を受け生活する方にとっては、毎月の生活費から捻出できる家賃に限りがあるうえ、家賃が抑えられた物件の戸数が少ないことから、物件探しは簡単に行きません。町の不動産店の中には、「福祉物件の取り扱いはない」と断るお店も多く、周りのサポートがなくご自身で物件を探すことは、時間だけでなく心身の労力を要します。ハビタットではこれまでの経験を活かし、福祉物件にも懇意に対応してくださる不動産店とのネットワークを構築し、住まいを必

要とする方の希望に沿った物件探し、そして入居支援を通じて、生活の基盤づくりをお手伝いしています。

初めて緊急事態宣言が出された2020年4月は、ネットカフェが休業となったことを受け、ネットカフェ難民と呼ばれる方からの住まい探しの相談が連携する団体から寄せられました。あれから一年、住まいのニーズは徐々に高まっているように感じています。この半年だけ見ても、相談件数は昨年受けた相談件数を上回り、昨今では、相談者の年齢層が高齢の方から10代の若い層までと広がりを見せ始めています。

「4階あるから、4回休まないといけないんだよ。だから1階の部屋が良かったんだ」そう話すのは、60代後半の山田さん(仮名)です。年が明けた1月中旬、ハビタットが住まい探しをお手伝いした山田さんは、約20年ぶりにアパートでの新生活をスタートしました。山田さんはお若い頃に仕事上の事故でけがを負い、結果的に仕事、そして住む場所を失ったそうです。その後は、十数年にわたり都内の公園を転々と暮らしてきたそうですが、退去勧告を受け、この7年間は困窮者支援団体が用意した都内のシェルターに生活の拠点を移し暮らしてきました。しかし、用意されたシェルターは階段で上り下りする4階のお部屋。足腰の悪い山田さんにとっては、外に出かけるのも一苦勞の生活だったそうです。地域になじみ、生活していけるよう、ハビタットでは関係福祉団体と連携し、定期的に山田さんのお宅を訪問するなど、入居後の見守り支援を継続しています。



「毎日が障害物競争でした」そう話すのは、幼いお子さんと暮らすシングルマザーの内田さん(仮名)です。離婚を機に都内のアパートに二人で暮らし始めたそうですが、離婚から数年経った今も当時の荷物が整理できずに残されるなど、家の中は足の踏み場がない状態でした。お子さんを健全に育てられる生活環境に改善したいと願うものの、体調の不良により部屋の片づけまで手が回らず、ハビタットに相談が寄せられました。コロナ禍ということもあり、スタッフ2名が3回にわたり内田さんのお宅を訪問し、片付けをお手伝いしました。部屋の片づけを終えると、「物の把握をすることもでき、自分一人では判断できないことに知恵をかり、捨てられなかったものも捨てられました」と笑顔で話す内田さんを見ることができました。まだ体調に不安がある内田さん、今後は福祉制度を使って日常の生活支援を受けるそうです。お子さんと二人新たな生活の一步を踏み出す後押しをする片付け支援となりました。

## 今ある住まいを守る: 清掃・片付け支援

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、「ステイホーム」が合言葉となって一年、都内では2021年4月末から3度目の緊急事態宣言を迎えました。長期化する自粛の呼びかけに、危機感が薄れると言われる一方、高齢の方や持病をお持ちの方にとっては、命を守るための「ステイホーム」であり、自宅に引きこもりがちな時間が続いています。しかしながら、関係する高齢者福祉を担当する方からは、ステイホームにより自宅に引きこもることで日常の運動が減り、身体機能が衰えるのではといった心配の声が聞かれます。ハビタットではこれまで支援を実施してきた高齢者の方への見守りにも注力しています。

一方、事務所を置く新宿区内の子ども家庭支援センターとの関係が深まり、新たに母子世帯からの相談が増えるなど、支援対象が広がり始めています。母子世帯の場合、女性による支援を希望することが多く、度重なる緊急事態宣言下ではボランティアを動員できないため、事務局の女性スタッ

フで調整しつつ支援活動を継続しています。

コロナ禍、これまで以上に自宅で過ごす時間が増えた今、誰もが安心して生活できる居住環境を持てるよう、清掃と片付け支援を通じて居住環境の改善を目指していきます。



## 思いをつないで取り組む住まいの支援

国内居住支援「プロジェクトホームワークス」は一部の活動資金を助成金で補うものの、その多くは個人や企業の皆さんによるご寄付で支援を継続することができています。昨年末に開催したチャリティガラでは、たくさんの方からプロジェクトホームワークス向けにご支援をいただくことができました。また、米投資銀行のジェフリーズ・フィナンシャル・グループのペグ・ブロードベント最高財務責任者(CFO)が新型コロナウイルス感染症の犠牲になられたことをうけ、世界各国の同社の社員また関係者が寄付を募り、その一部がハビタット・ジャパンに寄せられました。ジェフリーズ日本代表の田中匠氏は、「故ブロードベントをはじめ、多数の命がこのパンデミックにより失われていることに、心を痛めています。ジェフリーズは、支援を必要としている人々を助ける当社の活動の一環として、『世界コロナウイルス救援チャリティー・デー』を実施いたしました。コロナ禍の中で支援を継続するハビタット・ジャパンの活動の一助となることを期待しています」とご寄付に際してお言葉を寄せてくださいました。ハビタット・ジャパンでは皆さまから寄せられるご支援を通じて、一人でも多くの方が安心・安全に暮らせる住まいを持てるよう、引き続き取り組みを続けてまいります。ジェフリーズ・フィナンシャル・グループをはじめ同社の皆さま、ご支援ありがとうございました。

# Jefferies

## 児童養護施設の修繕支援：子どもたちの未来への懸け橋をつなぐ

私たちの身近なところに、経済的困窮やドメスティックバイオレンスなどにより身の安全の確保が必要となる方を保護し、自立につなげる支援を行う施設があります。施設に暮らす人にとっては、そこはきちんとした生活を取り戻す基盤であり、一時的でも「家」に代わる居場所です。ハビタットでは、国内居住支援「プロジェクトホームワークス」を通じて個人の住まいの確保や清掃を行うほか、こうした施設の修繕にも取り組み、そこに暮らす人が安心して生活できる居住環境を持てるよう支援しています。この春からは、企業や団体、また個人の皆さまからのご支援のもと、児童養護施設や母子施設の修繕支援に更に力を入れ、コロナ禍でこれまで以上に求められる安心して暮らせる居住環境の実現に取り組んでまいります。



### ジョンソン株式会社と協働

グローバルな家庭用化学品メーカージョンソン株式会社とアジア 7 カ国で締結したハビタットのパートナーシップのもと、日本では障がいのある未就学児から専門学生までが暮らす障害児入所施設「横浜訓盲院」での修繕支援の実施が決定しました。全居住棟の居室内をはじめ廊下の LED ライトへの取り替えのほか、一部居室の畳や壁の修繕を実施します。その他、同社の支援のもと、母子施設を含め、全 4 施設で子どもたちの健全な育成に必要な住環境を目指した修繕支援を実施します。



### 児童養護施設での外壁補修を完了

児童養護施設「バット博士記念ホーム」(東京都・町田市)内の「憩い寮」は、施設を出る前の子どもたちが職員の方と自立生活を学ぶ場として活用されています。しかし、38 年前に建てられた寮の外壁は塗装がはがれ、鉄筋がむき出しになっていました。そこで、ハビタットによる外壁補修の支援を決定し、この春ようやく補修を終えることができました。併せて、施設の敷地外周に設置された側溝の掃除と補修も行い、企業ボランティアをはじめ、学生支部のメンバーなどが活動に参加しました。

## 児童養護施設の修繕支援を応援 チャリティラン「Home Run 2021」開催

4 月 18 日、一週間にわたるバーチャルチャリティラン「Home Run 2021」のリアルランイベントが皇居外苑で開かれました。初開催となった「Home Run 2021」はコロナ禍であること、そしてハビタットのサポーターが国内外に広くいらっしゃることから、ハイブリッド形式を用いて、バーチャルとリアルランの併用で実施しました。皇居ラン当日は緊急事態宣言明けの週末であり、春の陽気に恵まれたということもあり、ランナーまたウォーカーとして子どもから大人まで総勢 100 名を超える方々がリアルランに参加くださいました。マスクの着用と手の消毒を徹底しながら、参加者の家族や運営を手伝ってくれた 32 名の学生ボランティアの応援のもと、事故やけがも無く、参加者がそれぞれのメニューを完走することができました。Home Run 期間中に最も長い距離を走り抜いたランナーの幅野さんは「子育てを終えた今、子どもたちのために何かできることはないかと走ることができました」とチャリティランをきっかけに、支援を必要とする子どもたちのために一歩を踏み出すことができたそうです。バーチャルをあわせ、参加くださった約 300 名のランナーそしてウォーカーの皆さま、また参加ランナーを応援するためのスポンサー寄付を寄せてくださった皆さま、ご参加ありがとうございました。

## インド・インドネシア・カンボジアにおけるコロナ支援

新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、ハビタットでは未だ海外建築ボランティア「グローバル・ビレッジ(GV: Global Village)」の休止が続いています。日本からも年間1,500名近くのボランティアを派遣していたアジアの国々では、ボランティアの不足をはじめ、ボランティアに支えられた活動資金の縮小といった影響を受けています。しかしながら、これまで以上に水と衛生の取り組みをはじめ、ウイルスから身を守る安心して暮らせる住まいのニーズが高まり、各国では支援地域でコロナ緊急支援を立ち上げるなどし、安心・安全に暮らせる住まいの実現に向けて、本国スタッフと、再開可能な国ではボランティアと協働し支援活動を続けています。



### ハビタット・フォー・ヒューマニティ・カンボジア

日本からのボランティアも多く訪れるカンボジアでは、都市部におけるスラムなどインフォーマルな居住地に暮らす住民の災害や新型コロナウイルスといった感染症に対するレジリエンス向上に取り組んでいます。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、これまでに15のコミュニティで2,300世帯を超える家族にマスクやアルコール消毒など衛生用品キットを配布したほか、コミュニティ内に衛生設備を備え、住民の生活環境の向上を目指した取り組みを続けています。

### ハビタット・フォー・ヒューマニティ・インド

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、インドでは仕事を失うなどして新たに貧困層に加わった人口は2億3千万人に上るとわれています。そして、新たに何百万もの家族が住まいを失う危機にさらされています。ハビタットでは、インドでの感染拡大を受け、新型コロナウイルス緊急支援として「Road to Recovery(復興への道のり)」を立ち上げ、支援開始から352日間で132万人以上の人々を支援してきました。医療従事者をはじめ、困窮世帯に衛生キットをはじめ生活必需品キットを提供してきたほか、条件付現金給付や衛生に対する行動変容の普及などに取り組んでいます。また、医療体制を強化すべく、地方自治体などと連携し、医療機関や政府機関で使用されていない建物を整備し、スラムなどに暮らす人々が安心して隔離されるためのシェルターとしてハビタット・ケアセンターを開設しました。これまでに全16カ所に開設し、計1,975床のベットを提供しました。



### ハビタット・フォー・ヒューマニティ・インドネシア

インドネシアでは、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の警鐘が鳴らされた昨年の3月以降、約3か月間で新規感染者数が56,000人を超えました。その中には、懸命に治療にあたる医療従事者も含まれ、医療従事者の中には、家族をはじめ地域の人々への感染を恐れ、家に帰れない問題を抱えていることが浮き彫りになりました。そこで、ハビタットは、新型コロナウイルス感染症の治療にあたる医療従事者にシェルターとしてホテルを無償で提供する取り組みを開始し、昨年未だに12の病院に従事する1,821人の医療従事者にシェルターを提供しました。



### ホームパートナーストーリー

「3歳になる娘アパルナは一年前にガンと診断されました。今、アパルナが治療を受けられていることに感謝しています。治療にあたっては、夫と二人で生活をやりくりし、これまでに4,100ドルを費やしてきました。生活が苦しくなるものの娘の治療が最優先です。こうした生活が厳しい時期に、新型コロナウイルスの予防が求められ、ハビタットが無償で提供してくれた生活必需品キットは本当にありがたかったです」そう話すのはインドのダスさん一家です。生活必需品キットの配布はハビタットがインドで取り組むコロナ支援の一環です。

ハビタットはパークレイズとアジア太平洋地域の全5カ国でインド向けの緊急支援キャンペーンを立ち上げ、新型コロナウイルスの変異株により医療崩壊の危機にあるインド支援のためのファンドレイズを実施しました。日本からは約70名もの社員の方々が寄付をお寄せくださり、パークレイズによる寄付のマッチングを受け、総額130万円もの寄付を募ることができました。パークレイズの皆さま、ご支援ありがとうございました。



## コロナ禍で迎えた「ハビタット・ヤング・リーダーズ・ビルド」

アジア太平洋地域に広がる全 16 カ国と 1 地域のハビタットオフィスが一同に取り組むアジア最大規模のユースキャンペーン「ハビタット・ヤング・リーダーズ・ビルド(Habitat Young Leaders Build)」が昨年度も 12 月 5 日の国際ボランティアデーを皮切りに翌 4 月末まで開催されました。

日本では、例年この期間になると学生たちは合宿の開催や、街頭募金、ハビタットの海外建築ボランティアプログラムである「グローバル・ビレッジ (GV)」や国内居住支援「プロジェクトホームワークス」への参加をはじめ、大学キャンパスを拠点に地域のボランティア活動に取り組むなどしています。しかしながら、コロナ禍で迎えた今年度の HYL B では、対面での活動を行えない学生団体があるほか、ハビタットとしても、ホームパートナーやボランティアの安全を第一に、国内外の支援にボランティアを動員できない期間が続くなど、難しい状況が続きました。

こうした中、日本の学生たちはただ事態の終息を待つのではなく、今できる取り組みとして、オンラインを活用した GV 報告会を企画し、開催しました。これまで一度も GV に参加したことのない後輩に自分たちの経験を伝える機会を創り出すなど、ハビタットの学生支部(キャンパスチャプター)の一員として果たす役割は何かを伝え、「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界」の実現に向けた思いをつないでくれました。一方、ハビタットでは、期間中にユース育成の一環として新たにアジア各国の若者をオンラインでつなぐ初の国際会議「Youth from Home for Homes」を開催し、日本からも 5 名の代表学生が参加しました



### 変化を受け入れ挑戦することの大切さ (関西学院大学Eco-Habitat 代表 木下亜美さん)



私たち Eco-Habitat 関西学院は、今年で 27 年目を迎える関西学院大学三田キャンパスを拠点とするキャンパスチャプターです。現在総勢 106 名(5 月 22 日現在)のメンバーと活動しています。新型コロナウイルスが流行して以来、普段当たり前に行っていた対面での全体ミーティング、ボランティア活動、街頭募金、海外での家建築活動などすべての活動ができなくなってしまいました。

しかし、このまま何もしないわけにはいかないと真っ先に始めたのは、オンラインでの全体ミーティングです。オンラインミーティングになってからは常に試行錯誤の繰り返しですが、他大学のチャプターメンバーと合同ミーティングを行うなど、オンラインであるからこそその取り組みもできたと思います。例年 1 回生と 2 回生が合同で立ち上げる新プロジェクト企画も中止することなく、昨年の夏にオンラインで行うことができました。ホームレス問題をテーマに、物資支援や勉強会、チームビルディングを行った後、高校生を対象としたワークショップもオンラインで行いました。

オンラインゆえに準備は大変でしたが、参加した人の意識を変えられた満足度の高い企画として成功を収めたと思います。また、11 月には例年の東北スタディツアーをオンラインで実施しました。事前に準備した防災に関する議題やクイズで参加者の知識を深めるだけでなく、東北の方にもご参加いただき、防災備蓄や震災について直接お話を伺うことができました。そして、今年の春休みには、西日本で活動するキャンパスチャプターとの合同合宿をオンラインで開催しました。全国から集まった 100 名の学生は、2 日間にわたさまざまな議題に対して意見交換を行い、視野を広め、学びを深めた一方、合宿を主催した私たち自身も、オンラインでの準備を通じて、団体内の結束力を高めることができました。コロナ禍の状況で意識しているのは「変化を受け入れ挑戦する」ということです。今のメンバーに求められていることや今の状況でも出来ることを常に模索し、新しい形を生み出すことが大切だと感じています。コロナ禍が収まったら、みんなが望んでいる対面ボランティアが出来るように準備をしておくことなど、今と未来を見据えながら常に新しいことに挑戦していきたいです。

